

ルカによる福音書 15 章における
三つの譬えについて
—— Luther 訳聖書と現代ドイツ語訳聖書に基いて ——
(3)

角 谷 善 朗

3 弟息子の悔悛と父の許し

弟息子は父の下に戻るに当たって、先に、存命している父から財産を分与されているのであるから、神を畏れず、神に逆らった許りか、自分の父に向かっても罪を犯したことを悔い改めて、自分には最早息子として受け入れてもらう資格はないものと悟って、父の下に置いてもらって、父に尽くすことだけを切願して、雇い人の一人と同じ様に取り扱ってくれる様に、父に懇願することを決意するのである (18, 19 節)。

οὐκέτι εἰμι ἄξιος κληθῆναι υἱός σου
nicht mehr bin ich wert, genannt zu werden dein Sohn;
ποίησόν με ἓνα των μισθίων σου.
mache mich einen-deiner Tagelöhner!¹⁾(Luk. 15, 19)

詩篇 123 篇の都もうでの歌 (Ein Lied im höhern Chor) 1-2 節²⁾において、神に仕えるに当たっては、雇い人が主人に直向きに仕えるのと全く同様に、神が私共に慈悲を掛けてくれるまで、心して努めることを求めている。弟の固い決意はこの雇い人の献身的な態度に、通じるものがあると指摘されている³⁾のである。

肉親 (人) に対して罪を犯すのは、天 (神) に対して罪を犯すのと同じこと

であるので、弟は神に対する絶対的な信頼と服従に立ち戻って、父に赦罪を懇願するべく帰郷を決意するのである。帰郷は赦罪に通じていることは多言を要しないことである (Vmkkehr war zu Vertrauen und Gehorsam gegen Gott ohne jeden Vorbehalt⁴⁾)。

豚以下に扱われて、尾羽うち枯らした息子は、我が家に未だ遠く離れているのに、父は見付けてくれ、謝罪の言葉を皆まで言わないうちに、温かく出迎えられるのである (20, 21 節)。

Ἔτι δὲ αὐτοῦ μακρὰν ἀπέχοντος εἶ δὲν αὐτὸν ὁ πατὴρ αὐτοῦ καὶ
 (Als) noch aber er weit entfernt war, sah ihn – sein Vater und
 ἐσπλαγγίσθη καὶ δραμῶν ἐπέπεσεν ἐπὶ τὸν τράχηλον αὐτοῦ καὶ
 empfand Erbarmen und gelaufen, fiel er um – seinen Hals und
 κάτεφίλησεν αὐτόν.⁵⁾
 küßte ihn. (Luk. 15, 20)

父の温情溢れる応対ぶりは、息子が出て行ってから、身の上を案じ続けて帰郷を待ち侘びている父性愛が然らしめたものと察せられるのである。

抱擁と接吻は赦しの証しである。それに続いて最上の衣服と指輪を与えるのは、家族の一員として完全に元通りに受け入れることを証す⁶⁾のものであって、指輪は父の全権の代行を務められる資格を持つことも公にしている。その上に靴をはかせるのは、奴隷ではなく、自由民であることの保証であるのである (22 節)。

父は息子を喜んで受け入れて、元通りに息子としての権利を与えている。然るに父のこれらの言動は、当時のオリент社会ではまともでなく、それどころかスキャンダラスでさえ (für orientalische Verhältnisse ungewöhnlich, ja fast skandalös⁷⁾) あるにも拘わらず、父の喜びを強調するために、敢えて社会通念を逸脱する状況を設定しているのである。

斯くして息子の悔悟と父の赦しは、息子を根本的に再生して、新しい人間にすることになったのである。そしていなくなった息子の生還を悦ぶ祝宴が開かれて、肥えた小牛まで振る舞われて祝われたのである (23, 24 節)。

いなくなった羊及び無くした銀貨の二つの譬えにおいては、一匹の羊或いは一枚の銀貨を見付け出すまで捜し回って、首尾よく捜し出すと親しい人々と祝い合う喜びが語られている。いなくなった息子の帰郷を祝い合う宴の喜びも、前の二つの喜びと相通じるものである。とはいえ、三番目の喜びは父と子の肉親の情愛が絡んでいるのであるから、前の二つの譬えよりも一段と切実なものであって、喜びの度合いは高いものになっているのである。

而して三つの祝い合う喜びは何れも、神の国における永遠の喜びの食事に先立って、地上において、軽蔑され疎外されている取税人と罪人^{つみびと}と親しく食事の席に連なるイエス自身の喜びとも通じ合うものでもあるのであると指摘されている⁸⁾のである。

4 兄息子の憤りと父の諭し

ところで兄は父の弟に対する歓待と祝宴を目の当たりにして、父親一途に尽くして来たにも拘わらず、自墮落に暮して来た「あなたの息子」がされている様にしてもらったことはただの一度もない、と怒りをあらわにするのである (29, 30 節)。

ὅτε δὲ οὐίός σου οὐτος ὁ καταφαγών σου τὸν βίον μετὰ πορνῶν
als aber – dieser dein Sohn, – aufgezehrt habend deine–Habe mit Huren,
ἦλθεν, εθυσας αὐτῷ τὸν σιτευτὸν μόσχον.
gekommen ist hast du geschlachtet ihm das gemästete Kalb.⁹⁾ (Luk. 15, 30)

それに対して父は兄に、お前は家を捨てないで、^{わたし}私と一緒にいるのだから、私の物は全部お前の物だ。けれどもお前の弟は死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見付けられたのだから、喜び祝わない訳にはいかないのだ、と説得に努めるのである (31, 32 節)。

ευφρανθῆναι δὲ καὶ χαρῆναι ἔδει ὅτι ὁ ἀδελφός σου οὐτος
fröhlich sein aber und sich freuen mußte man (doch), weil – dieser dein Brder

νεκρὸς ἦν καὶ ἐζήσεν, καὶ ἀπολωλὼς καὶ εὑρέθη.¹⁰⁾
 tot war und zum Leben gekommen ist und verloren und gefunden worden ist.
 (Luk. 15, 32)

ルカ伝 15 章の第三の譬えの標題は、邦訳聖書においては、「いなくなった」息子、或いは「放蕩」息子が対応されている。そしてドイツ語訳聖書及びオランダ語訳聖書の場合においては、三つの譬えそれぞれに用いられている ἀπόλλυμι を踏まえて、der verlorene Sohn と de verloren zoon と標記されているのである。それに対して英訳聖書及びフランス語訳聖書においては、ラテン語の prodigus に由来する the prodigal son と l'enfant prodigue が標題に用いられているのである¹¹⁾。

さてフランス語訳聖書のうちで、極めて高く評価されているエルサレム聖書¹²⁾ (La Bible de Jerusalem 20 Siècles D'art Le Nouveau Testament 2009) においては、標題として l'enfant prodigue に加えて、Le fils perdu (= verlorene) et le fils fidèle (= (ge)treu¹³⁾) も併記されているのである。

悔い改めて帰郷して、父に温く迎えられた弟と、それに対するに、父の振る舞いを納得出来ないで、弟を白眼視して、弟を受け入れ様としない兄の両名を、標題として取り上げている手法は、この譬えの核心を突いているものとして、諒解されるのである。

兄は確かに勤勉であるが、義務的に務めを果たしているに過ぎないのであるから、自己に頼って、神に自分を委ねることの出来ない人間を象徴していると看做せる¹⁴⁾のである。

この様に生きている兄にとって、身勝手に過ぎた弟のことを、父は身鼻肩しているとしか思われぬのであるから、兄の心中は穏やかでなく、父は弟を偏愛していると憤慨するのも一理ある¹⁵⁾と思われるのである。

とはいえ、父が改心した弟を飲んで受け入れて祝宴まで開いてやるのは、神の慈愛の念に沿った行いなのである。神の慈愛の念は人間の尺度では推し量れないほど広く寛大なものである¹⁶⁾ので、神は罪人^{つみびと}と罪人の悔悛を見捨てることなく、直向きに捜し求めて見付け出して、救済するのを無上の喜びとしてい

る¹⁷⁾のである。

イエスは、「人の子がきたのは、失われたものを尋ね出して救うためである¹⁸⁾」と、自らの使命を告げている通りに、地上で神の慈愛の念を体して実践しているのであって、それはルカ伝 15 章の三つの譬え、就中「いなくなった〔放蕩〕息子」に託して、いなくなった者達を救済する神の世界終末の仕業を共に行なって、神の喜びを共に飲む気のない者は、それが元で永遠の生命の祝宴から (von Festmahl des ewigen Lebens) 閉め出される危機にある¹⁹⁾ことを諭しているのである。

更にまた、取税人と罪人と食卓^{つみびと}に着いて、彼等に親愛の情を示すイエスは父に、そのイエスを非難するパリサイ人と律法学者は兄に置き換えることが出来るのであるから、この譬えには、取税人と罪人と隔てなく付き合うイエスを咎めるパリサイ人と律法学者に、取税人と罪人^{つみびと}に対する彼等の意識と態度を改める²⁰⁾ (die Änderung ihres Sinnes und ihres Verhaltens gegen Zöllner und Sünder) 様に求めるイエスの博愛の念も込められているのである。

父親の崇高な願いを込めた諭しの言葉を以って、第三番目の説教は終わっているのである。ここで「いなくなった〔放蕩〕息子」の譬えを締め括る部分：「しかしこのあなたの弟は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから、喜び祝うのはあたりまえである²¹⁾」(32 節) のドイツ語訳を、Luther 訳原典²²⁾及び Zürcher Bibel 原典²³⁾、次に各々の現代ドイツ語改訂版²⁴⁾、更に現代ドイツ語訳聖書のうちで最も注目されている 4 点²⁵⁾について、報告することにする。

Luther 原典

du soltest aber frolich vnd guttes mutts seyn, denn diser deyn bruder war vnd todt ist widder lebend worden, er war verloren, vnnd ist widder funden. (1522.¹⁾)

Du soltest aber frölich vnd gut muts sein, Denn dieser dein Bruder war tod, vnd ist wider lebendig worden, Er war verloren, vnd ist wider funden. (1546.)

Zürcher Bibel 原典

du soltest aber frölich vnd güts müts sein / daß dieser deyn brüder was tod / vnnd ist wider läbendig worden : er war verloren / vnnd ist wider funden. (1531.)

Luther Bibel 改訂版

1. Du solltest aber fröhlich und gutes Muts sein ; denn dieser dein Bruder war tot und ist wieder lebendig geworden ; er war verloren und ist wieder gefunden. (1912.)
2. Du solltest aber fröhlich und guten Mutes sein ; denn dieser dein Bruder war tot und ist wieder lebendig geworden, er war verloren und ist wieder gefunden. (1956.)
3. Du solltest aber fröhlich sein dich freuen ; denn dieser dein Bruder war tot und ist wieder lebendig geworden, er war verloren und ist wiedergefunden worden. (1975.)
4. Du solltest aber fröhlich und guten Mutes sein ; denn dieser dein Bruder war tot ist wieder lebendig geworden, er war verloren und ist wiedergefunden. (1984.)

Zürcher Bibel 改訂版

Du solltest aber fröhlich sein und dich freuen ; denn dieser dein Bruder war tot und ist lebendig geworden, und [war] verloren ist wiedergefunden worden. (1942.)

Luther 訳原典及び Zürcher Bibel 原典において、過去分詞に ge- を欠いている。これは Mhd. では元来完了態の動詞の過去分詞には ge- がつかなかったのであって、そのなごりが見られるのである²⁶⁾。

Luther 訳原典の '46 年の版の gut Muts では、gut が語尾を欠いている語形が得られる。これはここでだけ見られるものであるので、Druckf.? と看做されている²⁷⁾。

Luther Bibel の 1912 年改訂版においては、gutes Muts sein は保持されているが、1956 年の改訂版に至っては、現代ドイツ語に即した語形、guten Mutes sein に書き改められていることが確められる。

1975 年の改訂版は改訂方針の一新を図ったことで知られる²⁸⁾が、guten Mutes sein は sich freuen に書き換えられているのである。そしてこの書き換えは Zürcher Bibel の改訂版においても行なわれているものであるが、1984 年の改訂版では、新たに Luther 訳を保持する方針で改訂²⁹⁾され、sich freuen は guten Mutes sein に書き直されているのである。

次に現代ドイツ語訳聖書の当該箇所の記事に移ることにしたい。

4 点の現代ドイツ語訳³⁰⁾の何れにおいても、前半の部分の訳文から、新たな訳出を意図するところが察せられるのである。

現代ドイツ語訳聖書

1. Wir mußten doch fröhlich sein und uns freuen! Denn dieser dein Bruder war tot ist wieder lebenig geworden, er war verloren gegangen und ist wiedergefunden worden. (Menge 1961)
冒頭の下線部には、Du solltest fröhlich sein und dich freuen. が添えられている。
2. Aber man mußte doch einfach fröhlich sein und sich freuen ; denn dieser dein Bruder war tot und ist wieder sein geworden und war verloren und ist wiedergefunden! (Rengstorf 1966)
3. Heute aber müssen wir ein Fest feiern und uns freuen ; denn dein Brder war tot und lebt wieder ; er war verloren und warde wieder gefunden. (Einheitsübersetzung 1976)
4. Wir konnten doch gar nicht anders als feiern und uns freuen. Denn dein Bruder war tot, jetzt ist er wieder am Leben! Er war verloren, aber jetzt ist er wie dergefunden! (Die Gute Nachricht 1984)

5 イエスの意図するところと内村鑑三の言

ところで、兄が父の論しを聴き入れて、家に入って祝宴に加わったか否かについては、イエスは語っていないのであるから、イエスの説教は中絶したままで打ち切られていて、完結していないのである。それ故に、父の諫めの言葉に対する兄の対応については、誰しも関心を唆られずにはおられないのであるが、それにも拘わらず、この点には全く触れられないままで、説教は終わるのであるから、読み終って、言わば尻切れ蜻蛉若しくは画竜点睛を欠くとも言うか、意に満たない想いが残ることは否めないと思われる。

併し乍らこの様に結末を欠いている構成は、イエスが意図的に選び出した手法であると推察されるのである。イエスは自分の話を聴くために集まって来た者達に、三つの譬えを順次語って来て、兄の怒りを宥める父の言葉の行^くまで話を進めた。この段階に至って聴き手が、次は父の論しに対する兄の対応が取り上げられると期待するのは無理からぬことであって、聴き手は一人残らず緊張して、イエスの発言を待っていたと思われるのである。

然るにイエスはここで話を打ち切って仕舞うのである。これは正しくイエスが、聴き手に自分に代わって、兄の対応について答えさせようと意図しているからに他ならないと思われるのである。イエスが要望しているのは、これまでイエスの話を傾聴して来た者達、就中パリサイ人達が、ここで語り手、即ちイエスに成り代って、兄の父と弟への憤りの発言に向き合って、自ら判断を下し

てそれに従って、自らの力で兄の応答の言葉を書き上げて、斯くて譬えを締め括ることにするのである。

そして語り手各々が兄の応答の部分を書き加えるに当たって、イエスの教えとも改めて向き合うことになるのであって、これは各人がイエスの教えの理解を一段と深めることに通じるのであるから、語り手とイエスの双方にとって、意義のあることは言うまでもないのである。

ところでイエスは聴き手の反応のうちで、最も注目しているのは、取り分けてパリサイ人と律法学者の反応である。パリサイ人は、ユダヤ教徒の主流派で、律法を遵守して信仰も篤いが、極めて独善的であって、自分達だけが神の恩恵に肖れる資格がある義人、それに対して他の派の者を押し並べて罪人つみびとと見做して、一線を画しているのである。そして律法学者の大半を占めているのは、パリサイ人なのである。

イエスはパリサイ人と律法学者を兄に例えているのであるから、イエス(父)の要望に応じて、彼等が兄の応答の言葉を纏めるためには、彼等は取税人つみびとと罪人(弟)に対する自分達の意識と態度を省みることを余儀なくされるのであるから、各人は常識では対応し難い厳しい課題が突き付けられていることになるのである (die pharisäischen Zuhörer sollen das Gleichnis ergänzen durch die Änderung ihres Sinnes und ihres Verhalten gegen Zöllner und Sünder.³¹⁾)。

常識の世界においては、善人は賞讃され、幸せを掴むが、悪人は誹られ、悪行の報いを受けるのが、この世界の論理であって、「この世界の道義の基³²⁾」をなしているのであるから、父が下の息子の帰郷を祝うのを上の息子が承服出来ず、不服を唱えるのは、無理からぬことと諒解されるのである。

これに対して父は兄に向かって、お前の弟は、死んでいたのに生き返り、見えなくなっていたのに見付かったのを喜び祝うのは当然のことであると、常識の世界を超越した世界の論理、即ちイエスの博愛の世界の論理を説いているのである。

いなくなった者達の救済という神の崇高な使命の遂行に加わって、それを達成して、神と共に歓び合うことを求めていることは、疑う余地はないのである。

この三番目の譬えにおいては、内村鑑三（1862 - 1930）の言を用いれば、「神が人類に対して持ちたもうみ心がいかばかり慈愛深きものであるか³³⁾」が、高唱されているのである。この譬え話の構成と展開は正に劇的であって、内容もイエスの教えの真髄に迫っているため、イエスの譬え話の中で最も高く評価されて、「たとえ話の王³⁴⁾」、或いは「福音書中の真珠³⁵⁾」と称されている程である。そしてこの話の展開には父が深く係わり合っているのは明らかである。然らば、斯かる事実在即すると、三番目の譬えを、「放蕩息子のたとえ話」、或いは一步先んじて「二人兄弟のたとえ話」と呼ぶのは、的を射ているとは言い難く、むしろ「二人の子を持つ父の愛のたとえ話」、または「二人の子を帰らせる父の愛のたとえ話³⁶⁾」と呼ぶ方が、適切であるとの注目に値する指摘がある。

6 A. v. Harnack と芥川龍之介

幾世紀を経てもイエスの教えは、変らない新鮮を保って我々を導いてくれる。

その彼の説教の偉大さは、簡潔なもので、然かも豊かなものであることに起因していると説く、敬虔な A. v. Harnack（1851 - 1930）の見解³⁷⁾は、傾聴に値するものである。

即ち説教の偉大さは、彼の思想の核心は簡にして要を得て余すところなく言い尽くされていると共に、彼の思想は些かなりとも尽きることにはない様に思われる程に豊かであることである。従って彼の教えや譬えを学び尽くすことは決して叶うことではないのである。併し乍らその理由はこれ丈ではないのである。イエスは彼の言葉だけでは究められないのであって、その言葉の背後に彼自身がいるからである。（Die Größe und Kraft der Predigt Jesu ist darin beschlossen, daß sie so einfach und wiederum so reich ist – so einfach, daß sie sich in jeder Hauptgedanken, den er angesprochen erschöpft und so reich, daß jeder dieser Gedanken unerschöpflich erscheint und wir die Sprüche und Gleichnisse niemals auslernen. Aber darüber hinaus – hinter jedem Spuche steht er selbst.）

近代日本文学においては、揺籃期以降より今日に至るまで、多くの作家がキリスト教と向かい合うことになった。それぞれの作家とキリスト教との関わり

合いは、各人各様であって、その成果は百花繚乱の感を呈している。

さて芥川龍之介（1892 - 1927）についてはイエスとキリスト教についての忌憚のない所感を、「西方の人」と「続西方の人」で、述べている。「西方の人」は彼の没年、昭和二年七月十日に、「続西方の人」も同年七月二十日、即ち彼の死の前日に擱筆したものである³⁸⁾。

彼の文筆活動について、「彼はおよそ人の尊しとして、善美にあこがれるものの裏面に無惨なエゴイズムの胎動を認め、それを冷然とした皮肉と風刺で戯画化しようとしたと評されている³⁹⁾」と説かれていて、その説明は、「西方の人」及び「続西方の人」にも符合しているところが多いのである。

その一方で、「彼の評論の多くは広い学識を底にひそめたもので、思いつきの放言や、出たとこ勝負の印象批評は比較的少ない、——というよりほとんどない⁴⁰⁾」とも指摘されていることにも留意しなければならない。

「芭蕉雑記」（大正十二年—十三年）の執筆に当たっては、少くとも芭蕉に関して出版された文献はすべて読破した様に、「西方の人」と「続西方の人」の執筆に際しても、多くのキリスト伝を読了したと推定される⁴¹⁾。

彼は熱烈なキリスト教徒の友人室賀文武に影響されて、一時はキリスト教に傾倒したのであって、室賀に薦められて内村鑑三の書に感動して、「聖書の中の奇蹟は悉く信ずる事が出来る」と明言した程であった。

然るに、「彼の理智はキリストを神として信仰することを拒否した⁴²⁾」のである。彼の言わば絶筆である「続西方の人」において、「キリスト教は畢竟キリストの作った教訓主義的文芸に過ぎない」（12 最大の矛盾）、更にキリストについて、「彼はジャアナリストであると共にジャアナリズムの中の人物——あるいは『譬喩』と呼ばれている短篇小説の作者だったと共に『新約全書』と呼ばれている小説的伝記の主人公だったのである」（13 キリストの言葉）と断じているのである。

芥川の見解は、既に前述してある内村の、強いて言えば、Harnackの見解と両極に立っていると言えるのである。双方の見解は、水と油に譬えられる位相容れないものであるが、何れの見解においても、的を射た考察が含まれているのも確かである。

「続西方の人」の「13 クリストの言葉⁴³⁾」において、芥川は「譬喩」を短篇小説と見做している。「譬喩」の中で、取り分け放蕩息子の譬えは、場面が劇的に展開して行く構成、登場人物の心理の動きを反映した言行、更に思い掛けない幕引きがその内容であることから、「たとえ話の王⁴⁴⁾」と呼ばれるに相応しいのは尤もであると共に、短篇小説としての条件も十分に満たしているのである。その点にも着目して、取り上げているのは、「巧妙なストーリーテラ」にして、「本格的な短篇物語ショートストーリーズの作者」である芥川ならではのと思われるのである。

7 Rembrandt

Rembrandt Harmensz von Rijn (1606 – 69) は、聖書の様々な場面に題材を求めた作品を発表していて、*der verlorene Sohn* を取り扱っている作品も多いのである。

先ず着飾って、「両親の家を出る放蕩息子」(素描 '32 – 34)、次いで「酒色に溺れる放蕩息子」2点(素描 '34 – 35 ; '35)が挙げられる。「レンブラントとその妻サスキアの肖像」(油絵 '34 – 36)は、放蕩息子の遊興に耽けた生活が人気を集めていた当時の風潮に迎合して、自らと妻を居酒屋にいる放蕩息子に準えて制作したと指摘されている⁴⁵⁾のである。

その一方で、「豚の世話をする放蕩息子」(素描 '47 – 48)では、餌箱の傍らで痩せ細って大地に跪き、両手を合わせて悔い改めている息子を画いているのであって、A. Dürer の銅版画 *der verlorene Sohn* (1496 年頃) の影響を受けているものと推定されている⁴⁶⁾。なお Rembrandt も *κερατιον* (= 蝗豆) を画いてはいない⁴⁷⁾のである。

「放蕩息子の帰宅」は3点あって、その内の1点の制作の年代は、「豚の世話をする放蕩息子」よりも早いものである。

'36年のエッチングは、左側から裸足で跪いて赦しを願っている息子を、右側の父が確りと抱き締めているのである。そして2人の他に最上の服と靴を持った雇人、更にまた窓を開いて2人の様子を注視している兄が画かれている。聖書の記述に拠れば、兄はこの場に居合わせていないのであるから、ここで兄を登場させているのは、注目に値する設定である。とはいえ Rembrandt には、

この場に憤懣やる方ない兄の存在は欠くことが出来ないと判断されているのである。斯くの如く Rembrandt の聖書画はなべて彼独自の聖書解釈に従って、場面が構成されていると指摘されている⁴⁸⁾のである。

'42年の素描は、がっしりした体格の父が正面を向いて、右側から身を投げかけている息子を固く抱き留めている。2人以外のあと1人幼い顔立ちの人物が添えられている。

晩年（'68 - 69）の油絵は、父と子を画面の左半分の約7割に収めている。右の端には、赤いマントを羽織った男が父と子を見下して立っている。この人物は兄と目されている⁴⁹⁾。その横には椅子に腰掛けている男、次いで立っている女、そして上の方にはいま1人の女の上半身が画かれている。3人も一様に父と子を見据えていて、その上に人物も周囲も左に行くに従って黒みを帯びているので父と子の姿を鮮明に際立たせているのである。

息子は父の前に跪いて、頭を父に凭せ掛け両手を延ばして父に縋っている。

父は穏やかな表情で頭をやや右に傾げて、息子に向き合って立ち、身を屈めて息子の肩に優しく両手を掛けて、自分の懐にひしと引き寄せている。息子の頭の部分を、父の両腕と肩に羽織られた赤いケープと赤い総飾りで作られる菱形の枠の中に（in einer rhombusähnlichen Form⁵⁰⁾）画いている技法は、悔い改めて父を頼って戻って来た息子を心底から歓んで迎えている父の心情を、余す所なく伝えているのである。

子細に観ると、息子の左足は素足で、怪我の跡が認められる。右足は靴を履いているが、それもぼろ靴である。服は着古してあちこち綻びている。併し乍ら、父の赤いケープの下から覗いている服と似ている暖かい褐色で彩色されているのであるから、子は父に助けを求め、父は子を見捨てないで受け入れてやる親子の絆の堅さが、ここでも表わされている。

'36年のエッチングの「放蕩息子の帰宅」において、久方振りに再会した父と子は、心の激しい動揺を抑えきれない表情を浮かべて、確と抱き合っている。この描写が画面全体に張り詰めた空気が漲っている厳しい印象をもたらしているのである。

これに比すると、晩年の油絵の画風は著しく変化した対照的なものであつ

て、前作の劇的な描写は影を潜めて、静的な美の情景が展開しているのである。父と子が抱き合う構図、父親の表情、色調の加減の何れに関しても、激しい表現は控えられているのである。然るに却ってそれが極めて味わいの深い共感を呼ぶことになって、観る者は思わず、穏和な安らいだ想いに満されるのである。

斯かる画風への移行には、Rembrandt は不遇晩年を送ることになった⁵¹⁾にも拘わらず、敬虔の念を深めて行ったことが窺われるのである。

斯くして Rembrandt は晩年に至って、神の測り知れない寛大な慈しみの念の程を、息子を確かと受け止めて、一つに融け合っている父親の姿に託して、体現しているのである。

さて Rembrandt の晩作の「放蕩息子の帰宅」は、Amsterdam の Rembrandt 美術館で展示されている。その原題は、De terugkeer van de verloren zoon⁵²⁾であって、terugkeer は terugkeeren = zurückkehren⁵³⁾から派生したものである。

同美術館の展示案内 (Catalogus van esten en tekeningen door Rembrandt Museum Het Rembrandthuis (Amsterdam, Netherlands) Het Museum 1962.) には、De terugkeer van der verloren zoon に、先ずフランス語訳：Le retour (= Rückkehr⁵⁴⁾) de l'enfant prodigue, 次いでドイツ語訳：Die Rückkehr des verlorenen Sohnes, そして英訳：The return of the prodigal son が添えられているのであるから、この対応に鑑みて、邦訳においても、「帰宅」とするより「帰郷」とする対応の方が適切であると思われるのである。

VIII 法華経の信解品の放蕩息子の譬え

さて「いなくなった〔放蕩〕息子の譬え」の調査報告を済ませた。次には、ルカ伝の放蕩息子の譬えに類似している譬えとして、信解品の長者窮子の譬えが挙げられるのであるから、両者を比較対照して、類似点、相違点を探ることは欠くことが出来ない。其れ故インド・中国・日本を通じて仏教思想の主流となった法華経⁵⁵⁾のうちの、第四番の經典「信解品」^{しんげほん}の七喻⁵⁶⁾の中で二番目に出てくる「長者窮子の喩」^{ちやうじやくうじ}が、調査報告の対象となるのである。

先ずルカ伝の放蕩息子と信解品の放蕩息子を比較対照し乍ら、両者の内容を要約しておくことにする。

キリスト教においても、仏教においても、譬えを巧みに活用して教えが説かれているのである。

ルカ伝の場合も、信解品の場合も、冒頭で主人公は父親の下から出て行って、とどのつまり生活に窮することとなる次第が記されている。

ルカ伝の息子は己の放縦な言行を悔悟して、父の下で、雇い人として働かせる様に懇願する旨を決意するのである。父は息子の帰郷を悦んで、詫びを入れる暇も与えず、即座に、弟を受け入れて、祝宴を催すのである。そしてこれに不満の念を顕にする兄を宥めるのである。然るにそれに対する兄の反応については、伝えてはいないのである。

一方信解品の息子は愚にも、騙されて父の許から家出して零落し、五十年の間彼方此方の国を放浪するに至る。その父親も他国に移って、大金持になるが、行き方知れずの息子のことをいつも思って、自分には跡取り息子がいないことを嘆き続けている。

さて痩せ衰え、皮膚病に罹っている息子は、父の大邸宅に近付いて、豪勢な暮らし振りに圧倒されると同時に、拘束されて仕舞うのではないかと恐れ戦慄いて、逃げ出す。

父親は一目見て、息子であることに気付いて、召使たちにこの男を連れて来る様に命じる。息子は、何も悪いことをした覚えのないのに殺されると怖れる余り、失神して倒れる。

父親は息子が貧しい暮らしに満足していて、豪気を疎んじていることを知っているので、敢えて父であるとは名乗らない。そしてどこでも好きな所へ行って宜しいと言ってやる。

それから父は策を弄して、改めて子呼び寄せて、糞穢くんえの清掃の仕事に就かせることにする。父親も汚れた衣服に着替えて、息子に近付き、欲しいものは何でもやるから、遠慮なく言うがよい。お前には、他の下男たちに有り勝ちな欠点は何一つ見られない。これからは実の子と同じに扱うと言ってくれるのである。

「その時、^{ぐうじ}窮子は、かく^{よろこ}遇せらるることを^{な お}欣ぶと雖も、^{やとい}猶故、自ら^{せん}客作の賤人なりと^{おも}謂えり。これに由るが故に、二十年の中において、常に^{あくた}糞を^{ほら}除わしむ」

斯くして、息子は二十年の間、排泄物の清掃に携わる。二十年が経過して、息子は富豪の邸宅に遠慮なく出入りする様になるが、昔と変わらず、藁葺きの小屋に住んでいるのである。

父親は己の死期を悟った時、息子に自分の莫大な財産の管理を託する。息子は管理人としての務めを立派に果たして、財産の内の何一つも私することはないのである。息子は期様に管理人として有能にして、高潔であるが、元は貧乏であったことを恥ずかしく思っている。これを知った父親は、死に臨んで息子を呼び寄せ、親族・国王・大臣を集めて皆の面前で、これまでの^{いきさつ}経緯を話してから、「これ実に、わが子なり。われは、実にその父なり。今、わが有する所の一切の^{ざいもつ}財物は、皆、これ、子の^う有なり」と宣言する。

息子は父のこの言葉を聴いて、大いに歓喜して、未曾有の思いを得て、「われは本、心に^{ねが}稀い求む所あることなかりに、今、この^{じねん}宝蔵は自然にして至れり」、即ちもともと、心に何の願い求めるところもなかったのに、今この宝蔵は自然にわたしのものとなったと思うのである。

さて「長者窮子の喩」で教え様と企図しているところについては、法華経の「信解品」の後半の部分で、次の通りに説かれている⁵⁷⁾。

この世の師である私は、…言葉の真実の意義を語られなかった。時至った時に、常に無欲で貧乏に甘んじていた息子を馴らして、馴らしたのちに財産を譲り渡した大金持の巧妙な手段さながらに、私は巧妙な手段を示して、無欲で勝れた「さとり」を求め様としない息子たちを馴らし、馴らしたのちに、この智慧を与えるという誠に困難な仕事をされたのであると解説している。

ルカ伝の父は息子を一目見るなり、悦んで受け入れたのと対照的に、法華経の父は直ぐには父とは名乗らないで、自分の息子を跡取りとして相応しく育て上げ様と決意して、人の嫌がる排泄物の清掃の仕事⁵⁸⁾に就かせる。彼はその息子に修行を積ませるために、相応しい業を与えたのであった。そして彼が次第に修行の段階を上って行って、高い形成を実現した時に初めて、それに相応し

く彼を待遇して、父親であることを明らかにしたのである。

息子が家出したのは二十歳ぐらいで、五十年後に父親と再会し、それから二十年間黙々と汚物の清掃を続けて、父が実父であること明かした時は九十才、父親は優に百十才の高齢に達している件、更に汲み取り人夫であった者が、多額の家計の監督に係わり、遂には公に莫大な財産の相続人となる件も、著しく現実ばなれしていると指摘されているのであるが、これこそは、「これを聞く者をして、現実とは別の宗教的体験に導き入れることを目的とする⁵⁹⁾」譬えの語り口の然らしめるところであると思われるのである。

「一人の父においては感情が物言い、一人の父においては理性が支配していた⁶⁰⁾」のであって、「この二人の父にみられる対照は、また釈尊とイエスにおける対照でもあった」そして、「イエスもしくは釈尊にしたがう者となったとき、その道の歩みかたは、この二人の流浪の子のごとくに相異っているのである」と指摘されているのである。

釈尊は、「人間理性の確信のうえに立ってその道を拓いた人」であって、「智慧による解脱涅槃の実現⁶¹⁾」こそが、究極の理想であったのである。

然るに、釈尊の教えに対して浄土門の仏教においては、「解脱涅槃の自力の道」は、「念仏往生の他力の道⁶²⁾」に、百八十度転換したものになっているのである。それは、「すなわち一箇の人格を仰いで、もっぱらそれに依り頼むところの、いわゆる絶対憑依の態度⁶³⁾」なのである。

本来の仏教は「自業自得果⁶⁴⁾」を原理としているのであるが、如何せん人間は「罪惡深く重く、煩惱うちに燃えさかかって、いずれの行も及びがたい⁶⁵⁾」ものであることには、己が充分に自覚しているところである。

それ故に「人は造惡の衆生にしてなおよく弥陀の慈悲救済にあずかることをうるか⁶⁶⁾」の問いに対して、惡業に結びつけられるのは責罰であるとするのが常識の論理である。然るに、法然(1133-1212)及び親鸞(1173-1262)は、惡業と結びつかねばならぬのは、「幸福であり、慈悲の救済である⁶⁷⁾」と説いている。

法然は「もとより阿彌陀佛は、罪惡深重の衆生の、三世の諸佛も。十方の如来も、すてさせ給ひたるわれらをむかへんと。ちかひ給ひける願にあひたてま

つれり⁶⁸⁾。」、更に「無智の罪人の念佛申して往生する事。本願の正意なりとて⁶⁹⁾。」と教え、そして親鸞は「善人なをもて往生をとぐ、いはんや悪人をや。しかるを、世のひとつねにはく、悪人なを往生す、いかにはんや善人をやと。この条、一旦そのいはれあるににたれども、本願他力の意趣にそむけり⁷⁰⁾」と述べて、悪人こそが本来往生の正機、即ち仏教の教法を受くべき資格を有する者であることを証しているのである。

法然も親鸞も悪人の慈悲救済を専らにしたのであって、本来の仏教とは隔絶しているのである。イエスも病める者こそ医者が必要であって⁷¹⁾、罪ある者こそ神の救いに浴する⁷²⁾に値すると説いているのである。

ルカ伝 15 章の「いなくなった〔放蕩〕息子」において、零落して戻って来た弟息子を、悦んで受け入れる父親に、墳瀆遣る方ない不平をぶちまける兄息子の言い分は、常識の世界の論理である。兄に対する父の論しは、常識を超越した世界の論理であるのであるから、罪ある者に対する神の博愛の表現であって、法然・親鸞の教えに相通じていることは明らかである。

仏教における浄土門の信仰のあり方とキリスト教の信仰のあり方とは、歴史的、社会的もしくは精神的背景は、はなはだ相へだたり、相異なっていることは、紛れもない事実であるが、「両者がすくなくともその基本的構造において、きわめて相似ている⁷³⁾」という指摘は、正に傾聴に値するものである。

キリスト教と仏教との比較的考察も重要な研究課題であって、更に検討を加える要があるのであるから、今後も研鑽を重ねて行くことに努めたい。それに関する報告については、後日を期したい。

(2017・11・5)

註

- 1) Das Neue Testament Interlinearübersetzung Griechisch - Deutsch Griechischer Text : Nestle - Ahland - Ausgabe (26. Auflage) übersetzt von Ernst Dietzfelbinger 4. vom Übersetzer korrigierte Auflage 1990.
- 2) Ich hebe meyne augen auff zu dyr, Der du ym hymel sitzest.
Sihe, wie die augen der knechte auff die hende yhrer herren sehen.
Wie die augen der magd, auff die hende yhrer frawen.

Also sehen vnseren augen auff den HERRN vnseren Gott, Bis er vns gnedig werde. (Luther
Der Pfalter 1524 – 1528. Ps. 123, 1 – 2.)

JCh hebe meine aff zu dir, Der du im Himel sitztest.

Sihe, Wie die augen der Knechte, Auff die hende jrer Herrn sehen.

Wie die augen der magd, Auff die hende jrer Frawen.

Also sehen vnseren augen auff den HERRN vnsern Gott, Bis er vns gnedig werde. (1545.)

Luther 訳原典の調査のテキストは、D. Martin Luthers Werke Kritische Gesamtausgabe (Weimarer Ausgabe) Die Deutsche Bibel 10. Band Erste Abteilung Weimar 1956. である。

- 3) die Erklärung zu Luk. 15, 19 In : Das Neue Testament Deutsch Teilband 3 Das Evangelium nach Lukas übersetzt und erklärt von K. H. Regenstorf 11. Aufl. 1966.
- 4) K. H. Regenstorf : die Erklärung zu Luk. 15, 20ff. 出典の Das Neue Testament Deutsch Teil 3 Das Evangelium nach Lukas は、註 3) に前述。
- 5) E. Dietzfelbinger : Das Neue Testament Interlinearübersetzung Griechisch - Deutsch は、註 1) に前述。
Luther 訳原典 (Weimarer Ausgabe Die Deutsch Bibel Bd. 6 1929) において、Lk. 15, 20 は次の通りに訳出されている。
Da er aber noch ferne von dannen war, sahe yhn seyn vatter, (1522.¹)
Da er aber noch ferne von dannen war, sahe jn sein Vater, (1546.)
- 6) die Erklärungen zu Luk. 15, 20–24. Jubiläumsbibel mit erklärenden Anmerkungen Die Bibel oder die ganze Heilige Schrift des Alten und Neuen Testaments nach der deutschen Übersetzung Martin Luthers mit erklärenden Anmerkungen 1964.
- 7) 註 6) と同じ出典である。
- 8) 三好 迪 : ルカ伝一五・一一 – 三二「放蕩息子」のたとえ。高橋 虔・B. シュナイダー監修 川島貞雄・橋本滋男・堀田雄康編 : 新共同訳 新約聖書注解 I 1992。
- 9) 出典は註 1) に前述した E. Dietzfelbinger : Das Neue Testament Interlinearübersetzung Griechisch - Deutsch
- 10) 註 9) と同じ出典である。
- 11) 角谷善朗「ルカによる福音書における三つの譬えについて — Luther 訳聖書と現代ドイツ語訳聖書に基いて — (2)」VI ルカ伝 15 章の第三の譬えの二通りの標題 教養論叢 第 138 号 2017 年 2 月。
- 12) 註 11) と同じ出典である。
- 13) C. W. Schuster und A. Régnier : Wörterbuch der Deutschen und Französischen Sprache

Zweiter Theil Französisch = Deutsch 2., Aufl. 1859.

- 14) 小川治郎：ルカによる福音書注解 一五・一一 - 三二 放蕩息子と兄の譬。

増訂
新版 新約聖書略解 1965。

- 15) 註 8) と同じ出典である。

- 16) 註 8) と同じ出典である。

- 17) 註 14) と同じ出典である。

- 18) ルカによる福音書 19 章 10 節 日本聖書協会 新約聖書 1954 年改訳

ἦλθεν γάρ ὁ υἱὸς τοῦ ἀνθρώπου ζητῆσαι καὶ σῶσαι τὸ ἀπολωλός.

denn gekommen ist der Sohn des Menschen, zu suchen und zu retten das Verlorene

出典は註 1) に前述した E. Dietzfelbinger : Das Neue Testament Interlinearübersetzung

Griechisch - Deutsch

Luther 訳は, D. Martin Lutheres Werke Kritische Gesamtausgabe (Weimarer Ausgabe) Die Deutsch Bibel Bd. 6 1929. に拠ると, 次の通りである。

denn des menschen son ist kommen zu suchen vnd selig zu machen das verloren ist. (1522.¹⁾)

Denn des menschen Son ist kommen zu suchen vnd selig zu machen, das verloren ist. (1546.)

- 19) die Erklärungen zu Luk. 15, 25–32. In : Stuttgarter Erklärungsbibel. Die Heilige Schrift nach der Übersetzung Martin Luthers mit Einführungen und Erklärungen 1992.

- 20) die Erklärungen zu Luk. 15, 11–32. In : Jubiläumsbibel mit erklärenden Anmerkungen. 本書は註 6) に前述してある。

- 21) 出典は日本聖書協会 新約聖書 1954 年改訳。

- 22) 註 18) に前述。

- 23) Die Zürcher Bibel von 1531. 1983.

Zwingli の訳業は, eine genaue Wiedergabe des Urtextes であって, Luther の聖書の訳出と並び得ると高い評価を得ている (Otto Weber : Grundriß der Bibelkunde. 8. Aufl. 1965, 2. 4. d) *Deutsche Bibeln.*)。

- 24) Luther Bibel 改訂版

1. Die Bibel oder die ganze Heilige Schrift des Alten und Neuen Testaments nach der deutschen Übersetzung D. Martin Luthers Nach dem 1912 vom Deutschen Evangelischen Kirchenausschuß genehmigen Text.

2. Die Bibel oder die ganze Heilige Schrift des Alten und Neuen Testaments Nach der deutschen Übersetzung Martin Luthers. 1967. (旧約は 1964 年, 新約は 1956 年改訂の成果を取めている)

3. Das Neue Testament nach der Übersetzung Martin Luthers *Revidierter Text 1975*

1976.

4. Die Bibel nach der Übersetzung Martin Luthers mit Apokryphen 1985. (旧約正典は1964年, 旧約外典は1970年, 新約正典は1984年改訂の成果を収めている) Zürcher Bibel 改訂版

Die Heilige Schrift des Alten und des Neuen Testaments. Nach der Übersetzung Ulrich Zwinglis revidierter Text 1931. 1942.

- 25) 4点の現代ドイツ語訳聖書の選出に当っては, 次の文献の記述を参照している。
1. E. Thimme: Neuere Übersetzungen. In: Biblisch - Theologisches Handwörterbuch zur Lutherbibel und zu neueren Übersetzungen. hrsg. von E. Osterloh u. H. Engelland. 3., Aufl. 1964.
 2. 塩谷 饒: ルター聖書 抜粹・訳注 1983, III ドイツ語聖書翻訳の歩み
4 別の新しい翻訳。
 3. Die Bibel für unsere Zeit Neuere Bibelübersetzungen. In: Handbuch zur Bibel. hrsg. von D. u. P. Alexander. 7., überarbeitete Aufl. 1991.
- 26) 註 25) の2. の塩谷 饒: ルター抜粹・訳注 1983, II ルターのことばへの手引 C 品詞の形態 5. 動詞 (vi) ge- を持たない過去分詞。
- 27) 註 18) に前述した D. Martin Lutheres Werke Die Deutsche Bibel Bd. 6 1929. の die Anmerkung zu Luk. 15, 32。
- 28) 塩谷 饒: ルター聖書 抜粹・訳注 1983, III ドイツ語聖書翻訳の歩み 4 ルター以後——普及と改訂。
- 29) D. Eduard Lohse: Vorrede zur Heiligen Schrift In: Die Bibel mit Apokryphen nach der Übersetzung Martin Luthers 1985.
- 30) 1. Hermann Menge: Die Heilige Schrift des Alten und Neuen Testaments. 11. Aufl. 1961.

古典語に精通した H. Menge ならではの原文の厳密な解釈を踏まえた明確な訳業であって, Fr. Tschirch も Mengebibel を, 現代ドイツ語訳聖書を代表するものであると見做しているのである (1200 Jahdeutsche Sprache in synoptischen Bibeltexten 1969 S.9)。

2. Das Neue Testament Deutsch Teilband 3 Das Evangelium nach Lukas übersetzt und erklärt von Karl Heinrich Rengstorff 11., Aufl. 1966.

Das Alte Testament 及び Das Neue Testament は, 諸家が共同で執筆した訳文と註解を収めた浩瀚な聖書註釈叢書である。詳細な註解は訳文と密接に関わっていて, 的確な訳出の成立の理解に益するところ多大である。

3. Die Bibel Altes und Neues Testament in neuer Einheitsübersetzung. 5 Bände mit 3500 Farbbildern herg. von Sr. Dr. Mirjam Prager OSB. und Univ.- Dog. Dr. Günter

Stember 4., Aufl. 1976.

旧教の聖書協会が唱道する聖書の新たな翻訳計画に、新教の聖書協会も協力を惜まず、共同作業の成果として刊行された画期的な統一訳聖書である。

この訳業のドイツ語は、明確で且つ格調高く、信頼のおけるものとして、高く評価されている。

4. Die Bibel in heutigem Deutsch Die Gute Nachricht des Alten und Neuen Testaments. 2., durchgesehene Aufl. 1984.

若年層並びに教会に疎遠な人々に向けた、平易で明瞭な訳出に主眼を置いている訳業である。平明さを旨とする訳出に依って、die Gute Nachricht は他の訳業とは趣を大いに異にしているが故に、大々的に受け入れられているのである。

4 点の現代語聖書についての解説は、註 25) で挙げてある 3 点の文献の指摘に拠るところが多い。

- 31) die Erklärungen zu Luk. 15, 11–32. In : Jubiläumsbibel mit erklärenden Anmerkungen 本書は註 6) に前述してある。
- 32) 増谷文雄：仏教とキリスト教の比較研究 第三篇 信仰論 第十二章 キリスト教における信仰と浄土門の仏教における信仰について (一) 四 1991。
- 33) 内村鑑三：神の慈愛に関する比喻 ルカ伝一五章一 – 三二節 内村鑑三聖書注解全集 第九卷 昭和六十年 に収録。
- 34) 註 14) に前述。
- 35) フランシスコ会聖書研究所：聖書 原文校訂による口語訳 ルカによる福音書 放とうむすこ 註の (10) 1975。
- 36) 榎原康夫：ルカの福音書 (五) 悔い改めた罪人 (一五 1 – 32)。増田誉雄・村瀬俊夫・山口昇編：新聖書注解 新約 I マタイの福音書—ヨハネの福音書 1990。
- 37) Adolf von Harnack : Das Wesen des Christentums Neuauflage zum fünfzigsten Jahrestag des ersten Erscheinens (1900). Einleitendes und Geschichtliches I. Das Evangelium 1. Die Verkündigung Jesu nach ihren Grundzügen.
- 38) 吉田精一：芥川龍之介 三十七 西方の人 近代作家研究叢書 121 1993 年。
- 39) 米倉 充：3 芥川龍之介 — 知性の敗北 近代文学とキリスト教 明治・大正篇 (現代キリスト教選書 7) 1983 年に収録。
- 40) 吉田精一：解説 評論家としての芥川 文庫版 芥川龍之介全集 7 2011 年に収録。
- 41) 註 40) に前述。
- 42) 註 38) に前述。
- 43) 芥川龍之介：続西方の人 註 40) の文庫版 芥川龍之介全集 7 に収録。
- 44) 註 14) に前述。

- 45) Hidde Gosse Hoekstra 嘉門安雄監訳：画集レンブラント聖書 新約篇 放蕩息子 1982。

原書は Rembrandt en de Bijbel Het Nieuwe Testament 1980 / 1981.

- 46) 海津忠雄：レンブラントの聖書 II 旧約聖書と新約聖書 放蕩息子の譬え 2005。
- 47) 註 11) に前述した角谷善朗「ルカによる福音書における三つの譬えについて — Luther 訳聖書と現代ドイツ語訳聖書に基いて — (2)」Ⅶ いなくなった〔放蕩〕息子の譬え 2 弟の破滅 教養論叢 第 138 号。
- 48) 註 46) に前述。
- 49) Christian Thympelel : Rembrandt Mythos und Methode mit Beiträgen von Astrid Tümpel Die späten Historiengemälden 1986.
- 50) 註 49) に前述。
- 51) Emil Ludwig : Rembrandts Schicksal V Der Bettler (刊行年代は不詳)
- 52) K. G. Bonn : Rembrandt De Ester Het volledige Werk 65 De terugkeer van de verloren zoon. 1963.
- 53) Nieuw volledig Hoogduitsch - Nederduitsch en Nederduitsch - Hoogduitsch Woordenboek, naar de beste en nieuwste bronnen bewerkt. Tweede Deel. (Nederduitsch.) terugkeern の項。1851.
- 54) C. W. T. Schuster und A. Régnier : Wörterbuch der Deutschen und französischen Sprache Zweiter Theil Fransöisch = Deutsch. retour の項。2., Aufl. 1859.
- 55) 坂本幸男・岩本 裕訳注：法華経〔3冊〕(上) 2016年 (中) 2015年 (下) 2015年。

「妙法蓮華経」の原文及びその書き下し文は坂本幸男の担当で、サンスクリット語原典の「サツダルマ=ブンダリーカ」(正しい教えの白蓮)の口語訳は、岩本裕が担当している。

- 56) 法華経七喩の個々の喩の名称と、その出典は次の通りである。

第一の譬 三車一車の譬, 火宅の譬 譬喩品第三。

第二の譬 長者窮子の譬喩, 信解品。

第三の譬 三草二木の譬, 藥草喩品第五。

第四の譬 化城の譬, 化城喩品第七。

第五の譬 衣裏繫珠の譬, 五百弟子受記品第八。

第六の譬 高原鑿水の譬, 法師品第十。

第七の譬 良医の譬, 如来寿量品第十六。

- 57) 当該個所の書き下し文は、次の通りである。
道師どうしに捨て見みしは わが心こころを觀みじたもうが故ゆゑなり。

初め^{かんじん}勸進して 実の利、有りと言きたまわざるは

富める長者の 子の志の劣なるを知りて

方便^{ほうべんりき}力をもって その心^{こころ}を柔伏^{にゆうふく}して

しかして後に乃ち 一切の財宝を付するが如し。

- 58) 須泥^{スニーク}多長老は、かつて不浄物の清掃を生業^{なりわい}としていたのであって、その頃の述懐。小部經典 長老偈經 620—625 (高楠博士功績記念會纂譯 南傳大藏經) 第二十五卷 昭和十一年 230—231 頁。
- 59) 渡辺照宏：信解品^{しんげほん} 法華経物語 2014 に収録。
- 60) 註 32) に前述した増谷文雄：仏教とキリスト教の比較研究 第四篇 実践論 第十八章「汝をして人と異ならしむるものは何ぞ」三。
- 61) 増谷文雄：仏教とキリスト教の比較研究 第三篇 信仰論 第八章 仏教における信について (一) 二。
- 62) 増谷文雄：仏教とキリスト教の比較研究 第三篇 信仰論 第十二章 キリスト教における信仰と浄土門の仏教における信仰について (一) 五。
- 63) 増谷文雄：仏教とキリスト教の比較研究 第九章 仏教における信について (二) 二。
- 64) 註 61) と同じ。
- 65) 註 61) と同じ。
- 66) 増谷文雄：仏教とキリスト教の比較研究 第三篇 信仰論 第十二章 キリスト教における信仰と浄土門の仏教における信仰について (一) 三。
- 67) 註 65) と同じ。
- 68) 念仏往生要義抄 法然上人全集 (黒田眞洞・望月信亭著 明治四十四年) 337 頁。
- 69) 法然上人行状畫圖第二十七 法然上人全集 (註 67) と同じ) 291 頁。
- 70) 歎異抄 第三段 金子大栄校注 2016 年。
- 71) Die starken durffen des artztes nit, sondernn die krancen, (1522.¹ Matth. 9, 12)
Die Starcken dürffen des Artztes nicht, Sondern die krancken. (1546.)
- 72) Jch bynn komen den ßndern zur busze zu ruffenn, vnnd nicht den frumen. (1522.¹ Matth. 9, 13)
Jch bin komen die Sünder zur busse zu ruffen, und nicht die Fromen. (1546.)
- 73) 註 32) に前述した増谷文雄：仏教とキリスト教の比較研究 第三篇 信仰論 第十二章 キリスト教における信仰と浄土門の仏教における信仰について (一)。